The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語と身体表現に見る日露文化交流 ： 大黒屋光太夫を中心に
Author(s)	生田, 美智子
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43187
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【5】

氏　　名	生田　美智子（いくた　みちこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　16664　号
学位授与年月日	平成14年3月6日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**言語と身体表現に見る日露文化交流** **－大黒屋光太夫を中心に－**
論文審査委員	（主査） 教　授　藤本和貴夫 （副査） 教　授　高岡　幸一　　教　授　津久井定雄

論文内容の要旨

本論文は、日露文化交流を、江戸期のロシア帰還漂流民である大黒屋光太夫の言語と身体表現の観点から分析し、考察したものである。「鎖国」時代の日露文化交流にとり大きな役割を果たしたのは、漂流民である。とりわけ大黒屋光太夫が媒介者としてはたした役割は大きい。彼以前にもロシアの土を踏んだ日本人漂流民は存在したが、日本への帰国を果たし、ロシア情報をもたらしたのは彼が最初であった。

ロシアにとっても、日本語学習の段階から遣日使節を派遣し日露の公式会談を実現させたことは、重大なエポックを画した。

光太夫は、多くの研究者により論ぜられてきたが、身体表現は不問にふされてきた。大黒屋光太夫の言語に関する研究は、村山七郎、岩井憲幸、ボンダレンコらによって行われているが、身体は全く視野の外にあった。中村喜和がいくつかの論文で日露会談の際の儀礼の挨拶にふれているのみである。異文化交流という視点から身体表現に焦点をあてたのは本研究が最初である。

本論の目的は従来ほとんどテクスト視されていなかった身体表現をも資料として扱うことにある。

本論文の構成と概要は以下の通りである。

まず、序では、本論分の意義および目的、ならびに先行研究と本論文の構成について述べている。

本論文の意義について述べるなら、第一に、江戸期の日露交流の新しいチャンネルの出現を指摘できたことである。江戸時代にも、長崎、松前、対馬、薩摩のいわゆる四つの口を通じて、オランダ、中国、アイヌ、朝鮮、琉球との異文化交流はあったが、光太夫の場合には「鎖国」体制の枠をこえて現地でロシア人と直接身体のレベルでも交流することで、幕府の情報統制に新しいチャンネルを開いた。第二に、言語と身体表現といった角度から日露交流を眺めることで、日露における異文化コミュニケーションの新たな一面、たとえば、従来は「つまらないこと」として学問のレベルで取り上げられることのなかった日露を代表する交渉者同士の身体表現をめぐるやりとりの姿と意味を明らかにした。

第1章「異文化受容の前提」では、光太夫がいつの時代のどのような知的・文化的環境の人間かを考察し、光太夫の出自、職歴、生活環境、重商主義的な田沼時代の雰囲気などに起因する行動の傾向、心理的性向、文化的傾向が異文化コミュニケーション・異文化理解を可能にする下地を準備したことを指摘した。

第2章「異境の光太夫」では、漂流から奇跡の生還を果たすまで、大黒屋光太夫が展開した異文化コミュニケーショ

ンの実態を言語と身体表現の観点から再現し、多重回路でコミュニケーションがおこなわれていたことを解明した。

第3章「光太夫のコミュニケーション力」では、言語と身体表現を軸に光太夫のコミュニケーション力を検討した。検討項目は、発音、語彙、文法、身体言語、習慣的行動の言語である。その結果、光太夫は身体表現と言語表現を組み合わせることでかなり高度なコミュニケーション力をもっていたこと、ならびに、光太夫のコミュニケーションは、働きかけの機能、交話機能に重点をおくものであったことが明らかになった。

第4章「光太夫が摂取したロシアの言語と身体表現」では、光太夫によりロシア文化の何が受容され、何が受容されなかったかを、光太夫の言語ならびに身体表現の特徴から検討した。検討項目は、発音、語彙、文法、身体言語、習慣的行動の言語である。その結果、彼が摂取したロシア文化はペテルブルグの貴族文化であったことが明らかになった。ペテルブルグは約10年の滞露期間中約9ヶ月しか滞在しなかった所であるが、それは彼の対露認識からして当然のことであった。

第5章「異文化の記述－『北槎聞略』の世界－」では、世界的に高い評価をうける『北槎聞略』の中で、異文化がどのように受容され、どのように対象化し提示されたかを、共著者である大黒屋光太夫の異文化受容回路と桂川甫周の異文化記述の手法から検討した。さらに、情報の中で何が提示され、何が提示されなかったかを明らかにすることで、甫周と光太夫の対露認識をさぐった。

第6章「異文化の翻訳－露訳『魯斉亜国睡夢談』より－」では、『魯斉亜国睡夢談』にある光太夫の女帝拝謁の際の手への接吻をめぐるロシア語訳とそれに付された珍奇な注を材料に、翻訳と翻訳者の問題を考えた。異文化の翻訳にとり大事なことは、当該事物の異文化における機能を伝えることであり、従来不適切とされていた光太夫の訳語は適切なものであったことを明らかにした。

第7章「異文化受容過程における変容－『ソフィアの歌』について－」では、光太夫が持ち帰ったロシア歌謡「ソフィアの歌」を検討した。この問題については、中村喜和の労作があるが、同氏は「ソフィアの歌」の日本語歌詞(『北槎聞略』所収）を光太夫の訳詞とみなす立場にたつ。本論は替え歌であるとみなす立場にたつので、必要上ソフィアの歌の訳詞を再び試みた。加えて、光太夫の語彙、文法を検討することで、従来光太夫の不正確な訳であると考えられてきた「ソフィアの歌」が替え歌であること、ならびに光太夫が替え歌にこめたメッセージを探った。

第8章「異文化の伝播－『魯斉亜国睡夢談』の世界－」では、鎖国時代に海外情報を書き残したい発信者と異国情報を渇望する受信者と禁制の異国情報があいまって選択された「夢」という情報伝達回路の問題を考えた。禁断のロシア情報がいかにして伝播されたか、江戸期の人々のまなざしはロシアのどの位相にむけられたかを検討した。

第9章の「オランダ正月の中のロシア」では、「芝蘭堂新元会図」の中の光太夫をとりあげた。「芝蘭堂新元会図」とは「鎖国」時代に西暦の正月を祝った蘭学者たちの会合を描いた図である。この中に光太夫がいることが指摘されて久しいが、それがどの人物であるかについては説が定まらなかった。本論は光太夫をロシア文字を書いている人物に同定するとともに、洋服姿の謎の人物が新吉であることを明らかにした。蘭学者の新年会の主賓席に座る光太夫の姿から、彼が西洋文明の体現者として遇されていることを指摘した。

第10章「ロシア学の胎動」では、ベニョフスキー事件やロシア船の日本近海出没により浮上した「北方問題」と蘭学隆盛による海外知識の拡大によりロシア書が多く出たが、光太夫の帰還によりそれがロシア学の胎動に結びつきえたことを解明した。

第11章「ロシア像の転回」では、光太夫がもたらしたロシア情報ならびに送還してきた使節団と日本人との直接コミュニケーションによりロシア像が脅威イメージから憧れイメージへと転回したことを明らかにした。

終章の「おわりに」では、本論でのべてきたことをまとめるとともに今後の課題に言及した。まとめとしては、光太夫の言語と身体表現を通して日露文化交流の諸相を検討した結果、以下の点が明らかになったことを示した。第一は「鎖国」下における異文化流入の四つの口に加えて漂流民という新しいチャンネルが出現したこと。第二は以後約60年にわたる開国までの日露関係に繰り返し現れる交流パターンの原型が浮き彫りになった。

今後の課題としては時間のスパンを拡大し、第二回使節（1804年）や第三回使節（1853年）の時の日露会談と比較し、言語と身体を通した江戸期の日露文化交流の実態と相互イメージを解明する必要がある。とくに、異文化摩擦に着目し、その歴史的意味を検討し、それぞれの文化的特性といかなる関係をもつかを構造的に見てゆきたいと思う。

論文審査の結果の要旨

本論文は、江戸時代、伊勢の白子から江戸に向かう途中に船が難破したためにロシアに漂着し、ほぼ10年のロシア滞在を経て鎖国中の日本に帰還した伊勢白子の船頭、大黒屋光太夫が、帰国後に伝えたロシア情報を基に成立した『北槎聞略』や『魯斉亜国睡夢談』のみならず、その他の多様な資料を網羅的に駆使して、それらをさまざまな角度から分析し、日露文化交流と日本におけるロシア認識の成立過程に新たな照明を当てたものである。鎖国中の日本に初めて帰還を許された大黒屋光太夫の伝説的研究や彼のロシア語や伊勢方言などに関する研究はこれまでもなされてきている。

本論文の意義は、第1に、言語コミュニケーションの成立しないアムチトカ島という孤島に漂着した大黒屋光太夫の異文化コミュニケーション、異文化理解の出発点が身体表現にあったことを残された言語テクストから読み解き、これまでほとんど不問にふされてきた身体表現に焦点をあてて日露文化交流史における異文化理解のプロセスの一端を明らかにしたことである。

第2は、このことが、特に光太夫において可能であった理由を、田沼時代という日本の時代背景や彼の出自、船頭という地位、彼が接触していたと考えられる江戸と伊勢のネットワーク、ペテルブルグに残した遺留本などをもとにした彼の文化的素養などから証明している点である。当時の国際社会の中での光太夫の文化人としてのレベルの高さを明らかにした点でも評価できる。

第3は、光太夫とその情報を記録した蘭学者の桂川甫周の共著である『北槎聞略』は、光太夫の優れた異文化理解能力と共に甫周の「百科事典編集者」としての能力とロシアに関する豊富な知識があってはじめて成立しえたことを丁寧に解明している点である。本書では当然両者が知っていたと考えられる軍事情報やキリスト教に関する知識が注意深く省かれている事実にも筆者は言及しており、光太夫と甫周がオランダを経由した従来の「ロシアの脅威」のイメージを慎重に払拭することを射程に入れていたという日本の対露認識の転換への寄与に言及している点も新しい。

第4は、光太夫がエカテリーナ女帝に拝謁した際の手への接吻に関する記述の問題である。日本では想像できないヨーロッパでの風習である身体表現を、光太夫は「ねぶる」という「土着」の日本語で受けとめることで文化の落差をうずめようとした。このことから異境を同じ人間の世界として再現しようとした光太夫のまなざしが見えると筆者は主張している。筆者はこの主張を補強するためロシア文化と日本文化における「接吻」をさまざまな観点から検討しており、説得力のあるものとなっている。

さらに本論文では、光太夫の持ち帰った「ソフィアの歌」が実は彼の替え歌であるとの論証や「オランダの正月」を描いた「芝蘭堂新元会図」中の光太夫の位置など多くの新しい発見が見られ、日露文化交流史に新しいページを開いたものであると評価できる。

本論文の表題である江戸期の言語と身体表現に見る文化交流については、さらに多くの帰還漂流民による記述が残されており、日本の対露認識の転回についてはさらなる論証が不可欠である。また、光太夫の残したロシア語表記等の解釈についてもいくつかの問題点が指摘された。しかし、本論文はきわめて貴重で有意義な成果を得たものであり、博士（言語文化学）の学位を授与するにふさわしいものと判定する。